# 私たちの住む地域の現状と活性について

臼井達也（NPO法人わかやま環境ネットワーク）

## Ⅰ　はじめに

近年、社会的な課題のひとつとなっている空き家の問題があります。2017年の国土交通省の調べによると人が住んでいない、いわゆるストック住宅と呼ばれるものが5,236万戸あるといわれており、これらの利活用について工夫が求められています。このことは、全国の地方エリアにおける過疎化の問題とも深い関係にあることから、個々の物件の活用だけでなく地域の社会システムとも照らし合わせた総合的な解決が不可欠となっています。

このような背景から本書では、地域の現状を把握し課題解決に繋がる社会実装を想定した学習指導案です。

## Ⅱ　単元名

私たちの住む地域の現状と活性について

## Ⅲ　単元の目標

地域の空き家、空き店舗の現状を知り、学生自らが自身との関わりを見つけて、地域の活性化に向けた活動計画と実施を目指します。

## Ⅳ　単元の概要

和歌山県は海に面した地域と山林に囲まれた地域があり、自然と深い関係を持ちながら発展した経緯あります。とりわけ一次産業分野中心の歴史や文化があり、そこが起点となって町が発展してきました。多様な豊かさがある一方で、消費の嗜好による需要の変化や物理的な収穫減少、また苦労をともなう労働分野から担い手の不足などが要因となって町から人がいなくなりつつあります。2018年に総務省がまとめた調査によると和歌山県の空き家率は20.3%と全国で2番目に多い県と言われています。

こうした現状についてSDGs（持続可能な開発目標）の11番「住み続けられるまちづくりを」のターゲットに掲げられている「国や地域の開発の計画を強化して、都市部とそのまわりの地域と農村部とが、経済的、社会的、環境的にうまくつながりあうことを支援する。」に即した学習を通じて、学生一人ひとりが起点となって、まちづくりに向けて行動することを目ざします。

## Ⅴ　指導計画

事業カリキュラムは以下の流れで行い、概ね12時間前後を想定しています。これらをもとに習得状況や計画づくりに必要な時間を充てながら進めていきます。

授業全体のフロー

| | |
|---|---|
| 1時間目 | 地域活性の基礎 |
| | ● 「住み続けられるまちづくりを」の意味を考える<br>● 「暮らし」に言葉を置き換えて、何が必要かを確認⇒衣・食・住のあり方を理解する<br>● そこから生活の基盤である「住」に焦点を当て、さらに必要な要素を確認 ⇒住みやすい環境／住みづらい環境を比較・想像 |
| 2時間目 | まちの現状把握 |
| | ● まちの現状について事前に情報を取得する⇒地域の不動産会社／役所などから入手<br>● 物件管理に携わる専門家による授業⇒地域の現状や課題点について様子を知る<br>● 現状確認に向けた準備⇒地域マップを用いて空き家や空き店舗に印をつけていく |
| 3～4時間目 | 現場での情報収集 |
| | ● 現地確認⇒前回得た情報をもとに実際に町歩きを行う⇒対象物件だけでなく周辺環境についても情報を集める<br>● 集めた情報をもとに空き物件となった理由や背景を想像してみる⇒仮説を立て原因となった要素をあげてみる |
| 5時間目 | 町と自分たちとの接点を探る |
| | • まちと自分たちとの関わりについて考えてみる⇒直接接点のある時間（通学・放課後など）<br>• 通学や放課後に校内学生がどんな関わりを持っているかを考えていく⇒行動に焦点を当てていく<br>• まちとの接点時間が多い「放課後の過ごし方」についてのリサーチ準備を行う |
| 6時間目 | 自分たちの行動について知る |
| | • 自らの行動をもとに質問項目を用意する<br>• その中から、町との関わりにつながるもの、行動の傾向を見るための嗜好などを選んでアンケートを作成する |
| 7時間目 | アンケート結果をもとにニーズを探る |
| | • アンケート結果の集計と分析を行う<br>• 分析については必要に応じて、統計に詳しい外部講師を起用する<br>• 集計結果から学生のニーズを抽出し、空き店舗利用の可能性を考える |
| 8時間目 | 専門家による建築とまちづくりの基本を学ぶ |
| | ● 建築士、まちづくりプランナーといった専門家から、建築の基本とまちづくりにおけるポイントについて知る<br>• 専門家から得た知識や必要な要素をもとに、計画準備を行う |

| | |
|---|---|
| 9～10時間目 | 現地での確認と情報収集 |
| | ● 現場に行って空き店舗の確認を行う⇒空間の間取りや設備などを目で確かめる（※対象物件は確保できない場合もあり、その際は専門家から資料写真などの提供を受けてすすめることも可能）<br>● 学生だけでなく、まちの人達にとっても利用しやすいデザインを考える<br>● 専門家のアドバイスをもとに、機能性（Wi-Fiや充電などの設備、）、快適性（フードやドリンク）、ユニーク性（居心地の良さや楽しさなど）、持続性（断熱や省エネルギー性能）の各項目について具体的なイメージを膨らませていく |
| 11時間目 | 発表準備 |
| | ● 実際のまちづくり現場を想定した発表の機会を設けた上で提案資料の作成<br>● コンペ形式での評価方法に近づけた2チーム以上を編成（クラスの人数により調整）<br>● プレゼンテーションのリハーサルや発表の役割分担を行い作業をすすめる |
| 12時間目 | 成果発表 |
| | ● プレゼンテーション⇒チーム単位で発表<br>● 校内学生や保護者などに内容を聞いてもらい、質問やコメントをもらう |

## Ⅵ　評価基準

| 知識、技能 | |
|---|---|
| | まちの現状についてどんな課題があるかについての理解 |
| | 実際の様子を確認し、抽出した要素を整理できる力 |
| 思考力、判断力、表現力 | |
| | まちづくりの必要性や発展について興味、関心をもっている |
| | なぜ、空き家や空き店舗になったかについてその理由を考えることができる |
| | 知り得た情報だけでなく、批判的な考えも持ち合わせながら自分の意見を出せる |
| 主体的に取組む姿勢 | |
| | 町との接点について意識し「自分ごと」として取り組める |
| | クラスの仲間や外部の専門家の協力を得ながら、計画・準備をすすめている |
| | 地域の特徴に目を向けて、様々な人々との関わりを意識しながら取り組んでいる |

## Ⅶ　最後に

本学習指導案は学生が「地域活性」という課題に対して興味と関心を持ち、自らが社会とのつながりを感じられることを目的としています。また専門家の授業を通じて「今の大人達はどんなことをしているか」を知り、専門分野について深く学ぶ必要性を感じることができることを想定しています。この単元を通じて、子供たちの創造力を引き出し、まちづくりに自らが関わることによって社会の一員として「自覚」や「誇らしさ」といった心根づくりを育み、地域の課題解決の新たな引き金となることを願っています。